

人文会ニュース

1987. 1

人文書講座XI

現代思想の視座…………… 古田幸男 1

《ポスト・モダン》の選択…………… 小林康夫 13

特約店の選定を終えて…………… 晶文社 萬洲隆男 22

沖縄・鹿児島研修旅行報告…………… 未来社 西谷能英 30

47

業務用

欲求心理学トピックス100

齊藤 勇編 人はいろいろな欲求をもっており、その欲求によって行動化している。本書は欲求についての心理学的研究から興味深い100のトピックスを選び、愉快なイラスト入りで紹介する。 1500円

ユング心理学の実際

織田尚生著 著者自身の長い分析体験と心理療法の経験に基づく豊富な具体例によって、夢、神話、昔話と心理療法とのかわりなどユング心理学の実際について分かりやすく語る。 1800円

センサリー・アウェアネス

「気づき」—自己・からだ・環境との豊かなかかわり

C. ブルックス/伊東 博訳 立つ、臥る、歩くなどの日常的行動の体験を通して画期的な人間探究の道を提示。 3500円

誠信書房

東京都文京区大塚3-20-6
TEL. 03-946-5866

ジンド・ヴァレリー 住復書簡 1・2

二宮正之訳 へ全二巻の二十世紀フランス文学の二巨星による五十年にわたる友情の記念碑。詳註付。各5200円

1890
1942

江戸の想像力

18世紀のメディアと表徴

田中 優子

博物学・浮世絵・世界図・読本など同時代の異質な個性とジャンルを織り込んで、蛇行する近世のへ運動を描く気鋭の処女作。 2600円

東京神田 筑摩書房 小川町2

世界の子ども文化

●岩田慶治編 各地の諸民族や伝統社会での子どもの多様な経験世界を探る 一五〇〇円

カウンセラーのための104冊

●氏原寛十・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕編 初心者必携のブックガイド! 一二〇〇円

更年期と個性化

●アン・マंकオイッツ 三木アヤ監修 更年期の女性の夢分析を通じて心と体のかかわりを考察 ユング心理学選書10 一五〇〇円

創元社

〒530 大阪市北区西天満1-4-2 ☎06-363-2531
〒162 東京都新宿区山吹町77 ☎03-269-1051

太田保世 著

老いの構図 その美学と人間学

心の老化は、年齢とかかわりなく訪れる。心の老化を防ぐ方法はある? 医師からの提案。 1400円

山下泰裕 著

黒帯にかけた青春

柔道人生と勝負哲学を綴った初の書き下ろし。強い山下、弱い山下のすべて。 1200円

東海大学出版会

東京都新宿区新宿3-27-1 東海ビル
☎(03)356-1541 〒160

現代思想の視座

古田 幸男

超越性

現代思想は難解だ、という言葉をよく耳にする。なるほど、宇宙論、社会論、科学論、生命論、言語論など、その主題は多岐にわたり、あらゆる現象、あらゆる関係について論述言及されていて、その多彩さに目のくらむ

ような思いがするし、その記述も手の込んだもので、論理を追うのに厄介な感じがないでもない。しかし、その根底にひそむのは、平凡な言葉だが、常に「人間とはいかなる存在か？」という問いであって、それ以外の何ものでもないようにぼくには思える。そう言っておいて、

しかし、直ちに次のように付け加えなければならぬだろう。この場合の問いは、“人間” という言葉にこれまでもいつも付きまといていた人間中心的な発想、かつて、ヒューマニズムという言葉にまつわっていた甘い幻想を一切放棄しての問いだということである。サルトルは『実存主義はヒューマニズムである』という論文を書いたが、今では、実存主義は最後のヒューマニズムだ、と言われる。それ以後の現代思想の流れは、終局において“人間” の否定に到ることも恐れない視点で“人間” を直視する営為である、と言ってよいだろう。それほどに現代は“追いつめられた” 状況に置かれている。

「人間とは何か？」という問いは、勿論、ギリシア時代以前からある。けれども、その問いにたいする答、あるいは、答にはならないにしても、それに対する思想の対応は、十九世紀半ばまでは、いわば幻想的なものであった。宗教的社会では、“聖なるもの”、“神” であり、時代をはるかくだってみても、啓蒙主義時代では“理性” であり、ヘーゲル主義では“世界精神” である。それらは、何らかの超越性を措定することによって、有限なる人間を止揚し、吸収しようとする世界観である。いわば、

人間の救霊、救済を目指し、人間の安心立命をはかるものである。マルクスでさえも、歴史を一個の人間の生長と見て“類的人間” の概念を抱いている点で、ヘーゲル流の世界観を承けつぐものと言えるだろう。

むき出しの個人Ⅱ実存

「神は死んだ」と宣言したのはニーチェである。一切の超越性を拒否しようと志した点でニーチェは、たしかに一面で、迷妄打破的現代性の旗手と言うべきであろうが、はたして“神は死んだ” のであろうか？ モスコヴィツシが近代以降の最大の発明だと言う“個人” は、経済的蓄積と科学技術の目覚ましい発展に支えられて、神の死を宣言するほどに強力になったことは事実だが、彼らとても、個々に孤立していることはできない。経済的交換にしても一人では成立し得ないのである。彼らは、社会として群れなければならない。彼らは、資本主義社会として結集することによって力を蓄え得たのである。そして、その個人たちの凝集体、組織体としての社会が、構成員である個人の、自由な発現を抑制し、拘束し、圧迫するようになるのである。キルケゴール、ヤスパース、

ハイデッガーなどを包含する実存哲学は、そうした、社会と個人の乖離の激化の渦中における思想として位置づけることができる。いくつかの面で、さまざまな個人主義的要素を失っていない独創的なこの哲学は、もはや理性や知覚といった個人の可能性を中心にしたものではなくて、反対に個人の限界を、課題の中心に据えたものだと、モスコヴィッツは診断をくだしている。

個人と国家

神は死ななかったばかりではない。ニーチェ自身が“超人”の思想によって個人を越えることになると同様に、個人を有機的に組織する社会、そして国家が、個人にたいして猛威を振り始めるのである。すでにJ・J・ルソーは普遍意志（一般意志）と個別意志の関わり合いを考察しているが、調和のとれた関係を見出すことなく歴史は急進する。第一次世界大戦は近代戦から現代戦への転換点である。一九一七年は、大戦の重圧によって、あらゆる過去の法制、機構、制度などの崩れ落ちた年であり、国家の存亡をかけた死闘（いわゆる絶対戦争、無制限な全体戦争）に転化した年である。大衆動員が制度

化され、国民の義務兵役と常備軍制が、国民の軍国主義化に拍車をかける。デカルト時代では交戦国間であつても民間人の交流は平時と同じくおこなわれたのに、第一次大戦以後は、非戦闘員の多数が戦火の犠牲になる。ヒロシマ・ナガサキの原爆はその象徴である。

二十世紀の逆説

ハナ・アーレントは、自由と平等を求める現代の二大イデオロギーである自由主義とマルクス主義が、二つながら国家の廃絶を志向しながら、それが産み出した社会体制がまったく逆なところ、つまりナチズムとボルシェヴィズムという全体主義に行きついてしまった逆説を分析している。ナチズムへの中に燃えさかる原初的な潜在力、基礎的感情のめざめを見て恐怖したのはE・レヴィナスである。ナチズムという人間集団は自らの組織の結集、強大化のために、手始めに、国家を持たないユダヤ民族への憎悪をいっそうあおり立て、彼らをいけにえにしたのである。エリー・ヴィーゼルの、アウシュヴィッツからのレポート『夜』はその証言である。人間と人間集団のそうしたすさまじい暴力を直視しない限り、人類

はいま即刻にも消えうせた方が身のためだ、というシオランの絶望の深さを本当に理解することはできない。

一九一七年はまたロシア革命の年である。革命は、人間に自由と平等を保証しない権力体制を廃棄して、新しい体制を作ろうと志す。民衆は、その新しい権力体制における指導者層に自らの自由を寄託する。しかしその権力は、階級や人種といったさまざまな理由のために、前代未聞の規模で、数百万の個人の犠牲を要求する。これが第三帝国（ナチス・ドイツ）でもソヴィエト・ロシアでも見られたことである。これが、二十世紀の現代社会に、まるで過去の遺物のような印象を与えながら、なぜそうなのかの理由がつかない現象である。ホルクハイマーやアドルノらのフランクフルト学派は、ナチズムとスターリン主義の最盛期に、そうした「自由」と「権力」の関係を問いつめている。アドルノは、概念的なものによって個別的なものを統合吸収する思考を拒否する。ホルクハイマーは、万難を排して個体の自律性を守ろうとする。サルトルもまた同様である。彼も、困難を承知で「自由への道」を歩もうとする。だが、未元に終らざるを得ない。

権力論

フランクフルト学派第二世代のハーバーマスが、理性と知識がどのようにして支配権力と結びつくかを考察するのと同様に、フーコーは、哲学者、歴史家として、理性の時代であった近代全体が二十世紀の全体主義へと行きつく内在的傾向を持っていたことを、人文科学の形成過程、狂気、犯罪者、性といったものの管理統制の歴史を精密に分析することによって考察する。政治的権力の全体主義化と中央集権化に応ずる、哲学、文学から日常生活にいたるすべてのものの両編成化と政治的なものとの共犯関係の成立過程を示すのである。こうした考察では、もはや人間とか個人は、砂時計の砂の一粒のように見える。ドムナックは「自由は、決定論に押しつぶされ、消える。主体は強制的でしかも責任不在のシステムの中に飲み込まれる。だから、構造主義が実存主義の人気をさらうわけだ」と指摘し、デュフレンヌが『人間の復権を求めて』を書くことになるのだが、人間を圧殺するのは構造主義ではない。生前のフーコーは、戦闘的に、反体制的異議申し立ての運動の先頭に、サルトルと共に立っていたのである。

フーコーに代表される激しく精緻な西欧近代批判はさまざまな分野で見られる。デリダの『脱構築』にしても、ドゥルーズの『逃走』にしても、リオタールの『漂流』にしてもその一環として考えなければならない。

暴力

人間は人間を殺す。二十世紀の歴史は、それ以前の全歴史のすべての殺人の総計よりも、数百倍も上まわる殺人の歴史である。これまで、迷妄と開化、野蛮と文明、自然と文化、動物と人間というパラダイムの上に築かれていた西欧近代思想は崩壊する。飾り立てた衣裳をすっかりぬぎ捨てた人間と、人間集団が見えてくる。そして、むしろ、西欧的・近代的・白人的・大人の・男性的論理こそが人を殺すのである。現代の思想家たちが、何らかの視点で暴力論を展開するのは至極当然のことである。ベンヤミンは一九二一年、すでに『暴力批判論』を書いたが、そこでは暴力は、国家権力に代表される秩序維持的『神話的暴力』と、それを破壊しようとする浄化的・自然的な『神的暴力』に二分されて考えられていた。けれどもレヴィナスは、ユダヤ人として同胞と共に、人間

が体験し得る最悪の極限を生きることによって、人間が暴力的存在であり、同時に、人間はまた、この世に存在すること自体が暴力を蒙る存在であると知る。つまり、抽象的な存在の問題ではなく、存在者と存在者、人々との顔の向き合いそのものに、『外傷』と『暴力』が介在するのであり、暴力を哲学の根本課題としなければならない。暴力をおさえこむ人間存在の新しい在り方を倫理的、実践的に構想しようとする。ルネ・ジラールは、人間が、他者の欲望を模倣することによってしか対象を欲望し得ず、その究極において敵対関係に陥り、相互的暴力の悪循環にはまり、際限のない復讐によって共同体全体を破壊しかねない存在であると指摘する。近代の法体系そのものが、そうした暴力の原理を根底に置いている点をあきらかにし、かつて宗教が担っていた、暴力回避の方策を示すのである。エドガール・モランは、ホモ・サピエンス（理性のヒト）はホモ・デメンス（錯乱のヒト）であると思えるを得ない、といい、心理的・情緒的な噴出、過剰、常規の逸脱について、ヒトの種がヒトになつてゆく人間化の過程における本能の退行による錯乱、無秩序の侵入を指摘する。しかも、それが人間化が進行

するために欠かせなかったと言うのである。ミシェル・セールにしても、ジュリア・クリステヴァにしても暴力の問題を論じている。

群衆

人間が寄りあつまって作りあげる群衆は、それを構成する個人の総和ではない。まったく異質のものである。先頃流行った「みんなで渡れば怖くない」で示されるように、そこでは個人の心理学では測れないさまざまな現象が見られる。エリアス・カネッティがみごとに描いたように、群衆は未開社会以来、人類史のいかなる時代にも見られる現象である。しかし、十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、ル・ボン、タルド、オルテガ・イ・ガセットが群衆に着目したのは、むしろ時代を先取りしていたといえる。なぜなら、二十世紀において良きにつけ悪しきにつけ、歴史の主役を演ずるのは群衆だからである。ファシズム、ナチズム、スターリン主義の運動も、近くはホメイニ革命もフィリピンのアキノ政権の成立も群衆なしには成立し得ない。群衆は、感動的な自己犠牲もおこない得ると同時に、身の毛もよだつ残酷な暴行も

個人に犯させるのである。二十世紀の群衆がかつて以上に破壊的で暴力的であることは、今では誰でも知っている。しかし群衆がいかなる存在であるかは、十分に知られていない。現代は大衆社会であると言う。特に日本では、それが好感をよぶ呼称であるかのように迎えられているらしいと思うのは、ばくの誤りだろうか？ セルジュ・モスコヴィッツは群衆について詳細な考察を展開している。

関係性と体系論

たとえば、レヴィナスの存在者と存在者の関係、たとえばカネッティやモスコヴィッツの個人と群衆との関係、たとえばホルクハイマーの人間と社会・国家との関係の現状を、変革し、根元的に結び直す必要がある。言い換えれば、暴力なき人間関係、強制なき他者との関係を再構築しなければならぬ。さらに言えば、自律性と他律性を調整しなければならぬのである。一つには、これはコミュニケーションの問題である。この点で、ソシュールの言語についての分析はきわめて啓示的である。言葉の断定性にも拘らず、その根底にある恣意性についての

新刊案内

刑事法学界の重鎮・岡藤重光先生の半世紀を
弟子の井上正仁教授が聞く。

わが心の旅路

初めて公開された知られざるプロフィール！

付 年譜・著作目録 四六判上製四三六頁 二五〇〇円

ソシエールの発見は、われわれの言語観に深刻な変化をもたらしつつある。他の一つは現代のシステム論である。エントロピー法則にしたがう人工機械とは異なって、自律的体系である生物システム、脳システム、社会システムといったものの研究は、人間の在り方に少なからぬ示唆を与えることになるだろう。科学的研究を直ちに人間の事象に当てはめることは、厳にいましめなければならぬが、新しい認識論は新しいパラダイムをもたらし、人間の叡知を増すことになるかも知れない。現に、ミシェル・セールやエドガール・モランのような人々は、システムにとって、それを破壊する恐れのある雑音、その体系にとっての無秩序を、生きたシステムは内部に取り込み、その無秩序と協働して新しい秩序を創造すると考えるのである。そのことによって、生きたシステムはネガ

エントロピーを得ることになる。死は生の要素なのだ。死に瀕した硬直した社会は雑音を拒否する。そのことによってその社会は死滅せざるを得ない。自己・組織化は無秩序を摂取し、それを秩序に変えるものであり、「自律性についての現代の偉大な思想家たちのすべては、アイレントからイリッチ、カストリアディスからアトランにいたるまで、そのことを知っていたし、語ってきた」と、ジャン・ピエール・デュビュイは書いている。なお、デュビュイの『秩序と無秩序』（近刊）は、いささかこみ入ったシステム論と人間の事象（たとえば人間の一生におけるさまざまな出会い、友情、恋愛、成功、挫折といったものの意味、社会体制と反体制運動との関係など）との関わりについて、きわめて示唆的な論文集であるように思う。

パフォーマンスばやりの文化は、飾りだけに熱中する“ヒラヒラ文化”ではないのか。

ヒラヒラ文化批判

痛烈・辛辣かつユーモアあふれる奥平康弘教授の痛快エッセイ集。 四六判カバー付二二六頁 一三〇〇円

 有斐閣
東京・神田・神保町

文 献 表

●ドイツ圏

M・ハイデガー

『存在と時間』(岩波文庫、中央公論社)

『ハイデッガー選集』全三三卷(理想社)

『ハイデッガー全集』(刊行中、創元社)

カール・ヤスパース

『ヤスパース選集』全三七卷(理想社)

エルンスト・ブロッホ

『希望の原理』全三卷(白水社)

『異化』(白水社)

『哲学の根本問題』(法政大学出版局)

『トーマス・ミュンツァー』(国文社)

W・ベンヤミン

『ドイツ悲劇の根源』(法政大学出版局)

『ヴァルター・ベンヤミン著作集』全一五卷(晶文社)

テオドル・アドルノ

『権威主義的パーソナリティ』(青木書店)

『ミニマ・モラリア』(法政大学出版局)

『アルバン・ベルク』(法政大学出版局)

『美の理論』(河出書房新社)

『社会科学の論理』(河出書房新社)

『三つのヘーゲル研究』(河出書房新社)

『楽興の時』(白水社)

『ゾチオロギカ』(イザラ書房)

M・ホルクハイマー

『哲学の社会的機能』(晶文社)

『理性の腐蝕』(せりか書房)

『道具的理性批判』(イザラ書房)

J・ハーバーマス

『コミュニケーション的行動の理論』全三卷(未来社)

『哲学的・政治的プロフィール』全二卷(未来社)

『理論と実践』(未来社)

『認識と関心』(未来社)

『イデオロギーとしての技術と科学』(紀伊國屋書店)

ハナ・アレント

『全体主義の起源』(みすず書房)

『人間の条件』(中央公論社)

『革命について』(中央公論社)

『カント政治哲学の講義』(法政大学出版局)

アルノルト・ゲーレン

『人間』(法政大学出版局)

『技術時代の魂の危機』(法政大学出版局)

H・G・ガダマー

『哲学・芸術・言語』（未来社）

『哲学修業時代』（未来社）

『真理と方法Ⅰ』（法政大学出版局）

●フランス圏

J・ポール・サルトル

『サルトル全集』全三七巻（人文書院）

メルロー・ポンティ

『知覚の現象学』（法政大学出版局、みすず書房）

『シーニュ』全二巻（みすず書房）

『弁証法の冒険』（みすず書房）

『眼と精神』（みすず書房）

レヴィ・ストロース

『野生の思考』（みすず書房）

『構造人類学』（みすず書房）

『今日のトーテムズム』（みすず書房）

ロラン・バルト

『サド、フリーエ、ロヨラ』（みすず書房）

『モードの体系』（みすず書房）

『テキストの快楽』（みすず書房）

『零度のエクリチュール』（みすず書房）

E・レヴィナス

『困難な自由』（国文社）

『超越・外傷・神曲』（国文社）

『時間と他者』（法政大学出版局）

『フッサールとハイデガー』（せりか書房）

ジヨルジュ・バタイユ

『呪われた部分』（二見書房）

『エロティシズム』（二見書房）

『ラスコーの壁画』（二見書房）

『内的体験』（現代思潮社）

ミシェル・フーコー

『言葉と物』（新潮社）

『狂気の歴史』（新潮社）

『監獄の誕生』（新潮社）

『性の歴史』全三巻（新潮社）

『知の考古学』（河出書房新社）

『言語表現の秩序』（河出書房新社）

『レーモン・ルーセル』（法政大学出版局）

ルイ・アルチュセール

『資本論を読む』（合同出版）

ジャック・ラカン

『エクリ』全三卷（弘文堂）

ジャック・デリダ

『グラマトロジーについて』全二卷（現代思潮社）

『エクリチュールと差異』全二卷（法政大学出版局）

『ヘーゲルの時代』（国文社）

『ボジション』（青土社）

『カフカ論』（朝日出版社）

ジル・ドゥルーズ

『アンチ・オイディプス』（ガタリと共著、河出書房新社）

『ブルーストとシーニュ』（法政大学出版局）

『ベルクソンの哲学』（法政大学出版局）

『カフカ』（ガタリと共著、法政大学出版局）

『カントの批判哲学』（法政大学出版局）

『ニーチェと哲学』（国文社）

ルネ・ジラール

『欲望の現象学』（法政大学出版局）

『暴力と聖なるもの』（法政大学出版局）

『世の初めから隠されていること』（法政大学出版局）

『身代りの山羊』（法政大学出版局）

『ドストエフスキー』（法政大学出版局）

『ミメーシスの文学と人類学』（法政大学出版局）

『地下室の批評家』（白水社）

J・ボードリヤール

『消費社会の神話と構造』（紀伊國屋書店）

『物の体系』（法政大学出版局）

『生産の鏡』（法政大学出版局）

『記号の経済学批判』（法政大学出版局）

『シミュラクルとシミュレーション』（法政大学出版局）

『誘惑の戦略』（法政大学出版局）

『象徴交換と死』（筑摩書房）

ミッシェル・セール

『生成』（法政大学出版局）

『離脱の寓話』（法政大学出版局）

『コミュニケーション』（法政大学出版局）

『ライブニッツのシステム』（朝日出版社）

フランソワ・リオタール

『ポスト・モダン条件』（風の薔薇）

『ポストモダン通信』（朝日出版社）

『現象学』（白水社）

エドガール・モラン

『オルレアンのうわさ』（みすず書房）

『人間と死』（法政大学出版局）

『失われた範列』（法政大学出版局）

『時代精神』全二冊（法政大学出版局）

『プロデメの変貌』（法政大学出版局）

『方法Ⅰ』（法政大学出版局）

S・モスコヴィッツ

『群衆の時代』（法政大学出版局）

『自然と社会のエコロジ』（法政大学出版局）

『飼いならされた人間と野性的人間』（法政大学出版局）

J・クリステヴァ

『記号の解体学』（せりか書房）

『記号の生成論』（せりか書房）

『中国の女たち』（せりか書房）

『テクストとしての小説』（国文社）

『ことば、この未知なるもの』（国文社）

『恐怖の権力』（法政大学出版局）

E・M・シオラン

『歴史とユートピア』（紀伊國屋書店）

『生誕の災厄』（紀伊國屋書店）

『悪しき造物主』（法政大学出版局）

『四つ裂きの刑』（法政大学出版局）

『崩壊概論』（国文社）

『実存の誘惑』（国分社）

ジャック・アタリ

『カニバリズムの秩序』（みすず書房）

『音楽／貨幣／雑音』（みすず書房）

『時間の歴史』（原書房）

『アンチ・エコノミクス』（共著、法政大学出版局）

●英米・ソ連・その他

L・ヴァイトゲンシュタイン

『論理学哲学論考』（法政大学出版局）

『ヴァイトゲンシュタイン全集』全二〇巻（大修館書店）

カール・ポパー

『歴史主義の貧困』（中央公論社）

『科学的発見の論理』全二巻（恒星社厚生閣）

『推測と反駁』（法政大学出版局）

『開かれた社会とその敵』全二巻（未来社）

G・ベイトソン

『精神と自然』（思索社）

『精神の生態学』（思索社）

オルテガ・イ・ガセツト

『大衆の反逆』（白水社、角川文庫）

『傍観者』（筑摩書房）

『現代文明の砂漠にて』（新泉社）

『反文明的考察』（東海大学出版会）

『ガリレオをめぐる』(法政大学出版局)

『哲学の起源』(法政大学出版局)

ミハイル・バフチン

『フランソワ・ラブレールの作品と中世・ルネッサンスの民衆

文化』(せりか書房)

『ドストエフスキイ論』(冬樹社)

『言語と文化の記号論』(新時代社)

『フロイト主義』(新時代社)

エリアス・カネッティ

『群衆と権力』(法政大学出版局)

『マラケシュの声』(法政大学出版局)

『断ち切られた未来』(法政大学出版局)

『救われた舌』(法政大学出版局)

『耳の中の炬火』(法政大学出版局)

ミルチャ・エリアーデ

『永遠回帰の神話』(未来社)

『エリアーデ日記』全一卷(未来社)

『聖と俗』(法政大学出版局)

『エリアーデ著作集』全二三卷(せりか書房)

イヴァン・イリッチ

『脱病院化社会』(晶文社)

『エネルギーと公正』(晶文社)

『脱学校の社会』(東京創元社)

『シャドウ・ワーク』(岩波書店)

『ジェンダー』(岩波書店)

オクタヴィオ・パス

『孤独の迷宮』(法政大学出版局)

『弓と竖琴』(国書刊行会)

M・サーリンズ

『石器時代の経済学』(法政大学出版局)

『人類学と文化記号論』(法政大学出版局)

古田幸男(ふるた ゆきお)

一九三〇年生まれ。東京都立大学大学院修士課程修了。

法政大学教授。現代フランス思想専攻。

訳書にE・モラン『人間と死』(法政大学出版局)、R・

ジラール『暴力と聖なるもの』、S・モスコヴィッツ

『群衆の時代』などがある。

《ポスト・モダン》の選択

小林 康夫

《ポスト・モダン》という言葉には、確かにどこことなく虚ろな響きがある。そして、その虚ろさにあえて耳を傾けようとはしない人々にとっては、それが同時にある種のいかがわしさに結び付けられてしまうのは当然であるかもしれない。

実際、その言葉は一方では、ひとつの時代、すなわちみずからを《モダン（近代）》と呼んでいた時代の終焉を告知しているようでありながら、しかし他方、それに替わるべき新しい時代についてはいかなる実質のないし肯定的な内容も明示してはいない。奇妙なことに、そこ

には意味の核となるべき中心的な理念が欠如しているように思われる。そして、それ故にこそ、この言葉は、積極的にしろ批判的にしろ、それを用いる論者ごとに、異なった意義を与えられ、違った解釈を受け、その混乱が一層それを不透明なものにしてしまっている。それはひとつの時代をくっきりと照らし出す理念の強力な光を持っているのではない。それが語るのは、むしろ、われわれが生きているこの現在が、すでにひとつの時代が終わり、しかも来るべき時代がまったく見えない、時代と時代のあいだの空隙であるということに過ぎないのである。だから、《ポスト・モダン》という時代があるのではない。《ポスト・モダン》は時代に与えられた名ではなく、状況——ある意味では《近代》^{モダン}という時代の終りなき終りの状況に与えられた名なのである。

だから、それを《ポスト・モダン》と名付けることに同意するにしろしないにしろ、それが少なくとも《先進国》と呼ばれるような諸国の文化にとっては、否定することのできない確固たる状況であることに目をつむるわけにはいかない。この《ポスト・モダン》という言葉が流通し始めるのは、大体一九六〇年代の後半から七〇年

代にかけてであるが、この時期を境にしていわゆる《先進諸国》の政治・経済・文化が決定的な変質を蒙っていることは、誰にとっても明らかであるに違いない。確かに、それは《変質》であって、様々な近代的な制度が大きく構造的に変化したわけではない。《国家》というもつとも近代的な制度をはじめとして、われわれの社会・文化を規定している諸制度は相変らず存続している。しかし、にもかかわらず、それらの様々な制度は、実際の運用において、すでに《近代》というプログラムに書き込まれていたその本来的な理念から微妙に逸脱し始めているのである。というよりも、制度はその正当性を保証していた理念にもはや基礎を置くことなく、しかし実効的な装置として機能し続けていると言ったほうがよいかもしれない。

二、三例を挙げておこう。例えば、国家。国家の理念的な全体性・統一性は、《多国籍企業》に典型的に見てとれる地球的規模の世界経済システムによってもはや、現実的には完全に乗り超えられてしまっている。国家は、共産主義国、資本主義国を問わず世界経済システムのひとつの調整の場に過ぎない。国家の決定力はすでにそれ

を超えるシステム全体に従属してしまっている。同時に、国内的にも、政府の国家権力の行使に対して経済システムの観点からの効率の原理が厳しく適用されようとしている（昨今の『行政改革』あるいは、営企業体の『分割・民営化』はそのような現象のひとつの徴候である）。

あるいは、大学、すなわち知の制度。これは、『ポスト・モダン』状況に哲学的なアプローチを試みたフランスの哲学者ジャン・フランソワ・リオタールの『ポスト・モダンの条件』が主題的に取り扱っている領野だが、『近代』を成立させた最大の理念的モメントが知であったことを考えれば、その重要性は否定し難い。しかも、実際に、六〇年代後半から七〇年代にかけての『ポスト・モダン』状況があらさまに定着し始める時期は、『先進国諸国』において同時に生じた大学を場とする紛争によって特徴付けられているのである。その学生達の運動は、確かに様々な『革命』の物語によって彩られてはいたが、しかし社会的な革命を目指したものというよりは、むしろ大きく変わろうとしている知のステータスそのものに対する『異議申し立て』であったと言うべきだろう。すなわち、これ以後、知は、『真理』という普

遍性の理念によって護られた独立した領野を形成するのではなく、徹底して経済システムに従属した領野として現われてくることになる。そして、それに対応するように、知自体も大きく変質する。それをここでは『工学化』と言っておくことにしよう。「人間工学」、「言語工学」、「生命工学」……ここ一〇年余りのあいだに各大学で新設あるいは再編成された学科の名称を一瞥するだけで、われわれは知の加速度的な工学化が及ぶ範囲を推定することができる。知の工学化は、知がまさしく投資の対象になったことを意味している。知を正当化するものは、『真理』という教育と研究を橋渡ししていた理念ではなく、テクノロジーにおける経済的な実効性にほかならないのだ。

まだまだ他の多くの事象を、『ポスト・モダン』状況の指標として差し出すことができる。あるいは家族という問題、あるいはマス・メディアなどによる社会の情報化の問題、あるいは対立・闘争を行動モデルとする社会運動の衰退など……。だが、これらの事象のどれにも共通して観察されるのは、資本の原理だけによって統御された経済システム——いやむしろ文化の全体を覆い尽し

ているという意味では《超経済システム》と呼ぶべきかもしれない——の圧倒的な優位のもとに、本来各制度の核を形成していた近代的な理念が限りなく空洞化されている状況である。そして、各制度が、《効率》あるいは《実効性》という唯一の判断基準に従属しているという事態である。

そのもっとも卑近な例を挙げれば、多額の生命保険に加入し、健康を気付かってジョギングに精を出す今日のわれわれは、みずからの身体も生死までも文字通り《資本》として扱っているのであり、われわれはみずからの《存在》に対して計算可能な《実効性》の基準を適用していることになるのである。

こうして《ポスト・モダン》状況においては、《近代》という枠組みを決定していた様々な理念が、現実的な《実効性》の前に、なしくずしの失効する。《ポスト・モダン》とは、端的に言えば、理念の危機にほかならないのである。そして、同時に、それは《人間》という理念、理念的に設定された《人間》というものの危機にほかならない。

《近代》という枠組みを決定していた中心的理念は、

あくまでも普遍性として考えられた《人間》であった。言い換えれば、そこでは、普遍性はもはや《神》という超越者ではなく、《人間》を尺度として考えられたわけである。だが、同時に、この普遍性は理念的にのみ考えられているのであって、けっして現実的に与えられているわけではなかった。そして、それ故にこそ、《歴史》というもうひとつの相補的な理念が要請されなければならなかったのである。《歴史》と《人間》とは対をなしている。《近代》すなわち《西欧》の基本的なプログラムである《啓蒙》、そのヴァリエーションのひとつでもあるマルクス主義的な《解放》、そしてまたヘーゲル的な《精神の生》の弁証法——これらの運動が、認識においてであれ、すべての個別的な共同体を超える共同体を目指す実践においてであれ、人間による人間の普遍的な本質の産出のプロセスないしプログラムとして《歴史》を生み出したのである。近代の人間とは、なによりも普遍性の理念によって統制されたこの《歴史》に主体的に係わる人間であった。自由な意志に基く選択、行動を通じて人々は《人間》という普遍性の実現への決定に関与し得ることが理念的に保証されていたのである。

とすれば、《ポスト・モダン》状況において、もっとも致命的な打撃を蒙るのが、このような《歴史》理念であることは明らかだろう。というのも、《効率》——すなわち、投資と収益との関係——を唯一の評価・判断基準とする超経済システムにおいては、《時間》はもはやこの理念的な《歴史》にはまったく結び付かないからである。そこでは、《時間》は《効率》そのものですらある。同じだけの再生産を行なうには、《時間》は短かければ短かいほどいいのだ。それは、本質的に、歴史の彼方に設定された理念的目的の方へは向かわない。また、システム全体の観点からすれば、そこではひとりの個人は、理念的にも、まして現実的にも、その全体の決定に関与することはできない。それはこの決定がなによりも実効的な、現実的な決定でなければならないからだ。そして、もはや誰にもこのシステムの膨大な現実的なファクターを見通すことはできないからである。それ故に、システム全体に係わる決定は、一群の《専門家》^{エクスパート}の手に、そして極限的には巨大な情報操作容量を備えた《機械》に委ねられることになるのである。

《機械》が《歴史》をつくる。意志と情熱ではなくて、

現実的な計算と計画とがシステムの《歴史》をつくる。

これがあくまで極限化された限りでの《ポスト・モダン》状況の在り様である。ところが、われわれはこのようなシステムを一方向的に拒否することも、またそれを《打倒》しようとすることもできない。というのは、システムはすでにそのようなシステム内の抵抗をそのファクターとして計算に組み込み、むしろシステムの活性化のために積極的に利用してさえいるからであり、また結局は、システムに対する《否》は、システム全体に対して、取り上げられていないファクターを計算するようにと要求し、そうすることによってその全体の《効率》を改善し、システムを一層精緻化するという要求にすり替わってしまうからである。システムは、その全体的な機能が実効的であるためには、つねに未知のファクターを計算可能なものとし、それを組み込んで、果しなく全体化していく必要があるのである。

現実的合理性の計算によって機能するこの非人間的な《機械》は、しかしただ単に非人間的であるのではない。それは、むしろ《欲望》というもっとも普遍的な人間の力を原理としているという点においては、極めて人間的

でもあるのだ。だが、同時に、このようなシステムは、それが人間の存在を計算可能な透明性においてしか考慮しないという点において、限りなく非人間的である。すなわち、そこでは、欲望は計算可能な合理的欲望へと一元化されているのである。言い換えれば、システムはすべてのファクターを計算可能なものにする一元化によって機能しているのである。言語は《情報》へと一元化され、時間は一様な《効率》へと還元され、人間社会は同質的な欲望の操作、関係網へと帰せられる。そして、このような一元的な同質性は、けっして人間的ではないし、またそれがどれほど似通っているように思われるとしても、それは、人間の《普遍性》ではないのである。

ここにおいて、われわれは、《普遍性》という近代的理念——より正確に言えば、あらゆる理念の正当性の根拠であった理念——のもとであるいは覆い隠されていたもうひとつの理念を見出すことになる。それは、人間存在の、そしておそらくは存在一般の、非共約的な《異質性》あるいは《特異性》である。そして、その明証こそが、けっして《情報》には還元されない言語活動の異質性なのである。言語は互いに異質な無数の《言語ゲーム》

によって成立しており、時間は互いに共約不能な特異な必然性に貫かれており、また欲望は、もはや計算することも分析することもできない不透明な無意識の広大な海へとつながれている。そこでは、人間はみずからへの関係においても透明な同質性、同一性を見出すことはできないのである。

だが、このように言うことは、近代の格律であった《普遍性》という理念を失効したものとして葬り去るということの意味はしない。そうではなくて、一元的な同質性によっては回収され得ない《異質性》において《普遍性》を見出すという困難な課題を引き受けなければならぬということ言われているのである。

そして、ここにおいて《ポスト・モダン》状況は、われわれにまったく新しい理念的な作業を課していることが明らかになる。そして、それこそが《ポスト・モダン》という言葉の唯一の肯定的な含義なのである。

《異質性》における《普遍性》、あらゆる一元化をすり抜けながら絶えず差異化していくような《普遍性》——このような一元的な論理構造には還元できない形態において《理念》すなわち《アイデア》を生み出すこと。

そして同時に、それは、《普遍性》という理念さらには《理念》一般を記述的に、つまり現実的にしろ、理想的にしろ状態的に考えるのではなく、むしろ実践的に、すなわち倫理的に、あるいは感性的に考え直すことを要求するだろう。

そのような企図がはたして実効的に可能であるかという問いは、すでにシステムの問いである。また、それがどのようなものであれ、現実的な効果としてはシステム内に回収されざるを得ず、そうしてシステムの自律的全体性に奉仕することになるということも、システムという観点にとってのみ有効な問題に過ぎない。共約不能な《異質性》における《普遍性》に向けての様々な近代的《理念》の鋳直しは、すでに人間にとっての現実を、シ

ステムという一元的な価値において現実化されたものとは異質な領域に見出している。人間は、現実とは、近代的人間が素朴に思い込んでいたように透明ではなく、計算可能ではなく、知によって全面的に記述可能なものではない。むしろわれわれは、《ポスト・モダン》状況がもたらす理念の空洞化を通してこそ、われわれがそこに組み込まれ、そこでみずからを《無力なもの》として了解しているこの現実とは異なる現実、未知なるもの、さらには非知なるもの、そして絶対的に他者であるものと向かい合うように要請されているのである。

とすれば、確かに《ポスト・モダン》という言葉には一種の虚ろな響きが内包されているとしても、その言葉を好む好まないは別にして、その虚ろな空洞そのものに

最新刊

日本史研究の新視点

日本歴史学会編

四六判・上製・三八〇頁／定価2300円

現在、日本史研究は一段とその深まりを見せ、より緻密になっている。また、学際研究の活発化にともない、研究法もきわめて多様化している。そこで研究上の問題点の中から二十三のテーマを選び、最もふさわしい研究者に執筆を依頼して刊行する。これまでの研究を整理することともに問題点の所在を明らかにし、更に今後の研究への展望を示す。

歴史手帳

1987年版

日記を兼ねたコンサイス読史備要として毎年歴史家をはじめ、教師・ジャーナリスト・作家・歴史愛好者・学生等、多数の方々が愛用しています。ポケット判／総頁三二八

日記を兼ねたポケット百科！
大冊の内容を盛る歴史知識の宝庫

発売中
定価7000円
(送料2400円)

吉川弘文館

113・東京都文京区本郷7丁目2-8
電話03-813-9151(代表)

耳を傾け、その響きにシステムの同一化を脱れていく多様な《異質性》を聴きこむという《パッション》 passionではなく《忍耐》 patience の仕事を引き受けようとするかどうか——それこそが、《ポスト・モダン》の選択なのである。

文献表

ジャン・フランソワ・リオタール

『ポスト・モダンの条件』（書肆風の薔薇）

『ポストモダン通信』（朝日出版社）

ユルゲン・ハーバーマス

『晚期資本主義における正当化の問題』（岩波書店）

『認識と関心』（未来社）

『理論と実践』（未来社）

『公共性の構造転換』（未来社）

『イデオロギーとしての技術と科学』（紀伊國屋書店）

リチャード・ローティ

『哲学の脱構築』（御茶の水書房）

B・マンデルブロー

『フラクタル幾何学』（日経サイエンス）

トーマス・クーン

『科学革命の構造』（みすず書房）

P・ファイヤアーベント

『方法への挑戦』（新曜社）

アラン・トゥレーヌ

『脱工業化の社会』（河出書房新社）

『声とまなざし——社会運動の社会学』（新泉社）

タルコット・パーソンズ

『社会体系論』（青木書店）

A・W・グルドナー

『社会学の再生を求めて』（新曜社）

イマニエル・ウォーラーステイン

『近代世界システム』I・II（岩波書店）

ニコラス・ルーマン

『法社会学』（岩波書店）

室井尚

『文学理論のポリテイク』（勁草書房）

橋爪大三郎

『言語ゲームと社会理論』（勁草書房）

『仏教の言説戦略』（勁草書房）

柄谷行人

『批評とポスト・モダン』（福武書店）

吉本隆明

『マス・イメージ論』（福武書店）

『重層的な非決定へ』（大和書房）

磯崎新

『ポスト・モダンの時代と建築』（鹿島出版会）

浅田彰

『構造と力』（勁草書房）

奥雅博

『ワイトゲンシュタインの夢』（勁草書房）

小林康夫（こばやし やすお）

一九五〇年、東京都生まれ。東京大学教養学部、同大学院博士課程、パリ第一〇大学博士課程修了。現在、東京大学教養学部助教授。フランス文学、現代哲学専攻。訳書に、J・F・リオタール『ポスト・モダンの条件』（書肆風の薔薇）、主要論文に「paralogia — 問いの場処」I・II・III（『エビステメ』II・1、2、3、朝日出版社）などがある。

特約店の選定を終えて

調査研究委員会 萬洲隆男（晶文社）

本年は、人文会が誕生して十九年、来年は創立二十年を迎えます。人間に譬えるならば成人式を迎える年になります。難局に対しても、若者らしい、潑瀾とした行動力のある会になるよう努力したいと願っています。さて昨春秋、第七回目の人文会特約店・準特約店を選定させていただきました。

選定の基準は前回と変わりなく、左記の基準によりました。

①特約店について

- ①会員二十社中十三社以上と常備契約されていること。
- ②会員社の人文図書を一、一〇〇冊以上展示されていること。

ること。

①会員社の人文図書を年間三、三〇〇冊以上販売されていること。

②準特約店について

①会員社二十二社中一〇社以上と常備契約されていること。

②会員社の人文図書を七七〇冊以上展示するか、または年間二、二〇〇冊以上販売されていること。

選定の結果は、表①の通りでございます。

注目されることは、特約店の数が二十七減って百五十を割り、反対に準特約店が六十八増えて、特約店より準特約店の方が若干ながら上回ったことです。

表① 特約店の推移

年 度	特約店	準特約店
49	188	
51	190	72
53	197	80
55	220	98
57	161	75
59	165	88
61	138	140

(年度は昭和)

地区的に見ると、地方での変動が激しく、反対に、札幌、東京都心、京都、大阪、博多の各地区では、あまり大きな変動はありませんでした。この現象には、人文書の変化とその対応のむずかしさが、如実に表われているように思えます。

一方、業界紙によると、昨年は史上最大の出店ラッシュで、昨年一月～十一月の累計で、一、一〇六店と五万二、二四八坪の増舗、増床があったと報じられています。

かりに、現在の書店の数を二万六〇〇〇店とすると、特約店の割合は、〇・五三%、準特約店まで含めて、一・一%にしかありません。

しかし、この一・一%の書店の力は、もちろん一・一%ではありません。さいわい準特約店の中身も、希望をもてるものでございます。以前、特約店、準特約店だった店が、また準特約店に復帰して来たのが、数多く見られるからです。

出版の販売状況は、今後一段と厳しさを増すことがあきらかです。このような厳しい状況のなかで、人文会として、特約店、準特約店への施策の必要性がますます増し、一日も早くそれを行動に移していかなければならないと

表② 人文会特約店年間売上ベスト50店

順位	地 区	書 店 名	枚 数	順位	地 区	書 店 名	枚 数
1	新 宿	紀伊國屋本店	105,484	26	神 戸	ジュンク堂センター店	13,194
2	大 阪	紀伊國屋梅田店	67,179	27	渋谷	紀伊國屋	12,982
3	中 央	八重洲ブックセンター	52,927	28	新 宿	芳林堂高田馬場店	12,938
4	大 阪	旭屋本店	50,466	29	渋谷	旭 屋	12,608
5	千代田	三省堂本店	40,743	30	京 都	京 都 大	12,203
6	京 都	駿々堂京宝店	34,053	31	京 都	アバンティブックセンター	12,093
7	豊 島	リブロブックセンター	31,232	32	大 阪	旭屋ナンバ店	11,929
8	名古屋	丸 善	27,748	33	千代田	法 政 大	11,628
9	文 京	東大本郷	27,665	34	武蔵野	弘 栄 堂	11,605
10	目 黒	東大駒場	24,929	35	名古屋	日本福祉大	11,424
11	八王子	中 央 大	24,060	36	京 都	立命館大衣笠	11,165
12	渋谷	大 盛 堂	22,199	37	神 戸	ジュンク堂サンパル店	10,779
13	豊 島	芳 林 堂	21,120	38	横 浜	栄松堂ジョイナス	10,703
14	中 央	丸 善	19,997	39	豊 島	旭 屋	10,343
15	千代田	書泉グランデ	19,833	39	大 阪	ユーゴー堺店	10,343
16	横 浜	有隣堂東口ルミネ	19,483	41	千代田	岩波ブックサービスセンター	10,332
17	横 浜	有隣堂西口店	18,465	42	札 幌	旭 屋	10,227
18	仙 台	東 北 大	18,262	43	名古屋	名古屋大南部店	10,127
19	福 岡	紀伊國屋	17,704	44	広 島	紀伊國屋	10,049
20	新 宿	早大本校	16,881	45	新 宿	三 省 堂	9,496
21	横 浜	有隣堂イセザキ店	14,998	46	中 央	旭屋銀座店	9,214
22	千代田	明大本校	14,887	47	浦 和	須 原 屋	9,157
23	千代田	東 京 堂	14,870	48	大 阪	旭屋アベノ店	8,692
24	名古屋	三 省 堂	14,003	49	札 幌	紀伊國屋	8,500
25	茨 城	筑波大書籍部	13,593	50	札 幌	北大クラーク店	8,419

考えています。

どうか今後とも、特約店、準特約店の皆様、そして取次店各位の変わらぬご支援を賜りますようお願いする次第でございます。

参考までに、人文会会員社二十二社の販売データから、人文書だけの販売状況を表②にまとめました。紙面の都合で一部分しか掲載できないことを、お許し下さい。

人文会△特約店▽一覧表（※印は準特約店）

札幌 旭屋書店札幌店 紀伊國屋書店札幌店 富貴堂 北海
道大学書房クラーク店 リーブルなにわ 丸善札幌店
函館 ※森文化堂 ※函館西武書籍部
旭川 ※平和本店 ※三省堂書店旭川店
青森 成田本店
弘前 ※紀伊國屋書店弘前店 ※弘前大学生協 ※今泉本店
秋田 ※三浦書店 ※加賀谷書店本店
盛岡 東山堂ブックセンター ※第一書店 ※さわや書店
※東山堂 ※岩手大学生協
山形 八文字屋 ※山形大学生協

仙台 東北大学生協川内店 金港堂ブックセンター 丸善仙
台支店 八重洲書房 アイエ書店 ※金港堂 ※宝文
堂書店 ※東北学院大学生協 ※アイエ書店駅前店
福島 岩瀬書店コルニエツタヤ店
郡山 ※東北書店
水戸 ツルヤブックセンター ※川又書店駅前店 ※茨城大
学生協
土浦 ※共栄堂
古河 ※かもじや
新治郡桜村 大学会館書籍部 ※第一学群書籍部
新治郡 ※友朋堂書店
宇都宮 ※新星堂宇都宮店 ※アムスブックセンター
前橋 煥平堂書店 ※ブックセンターリプロ前橋店
高崎 ※新星堂高崎店
太田 ※ナカムラヤ
浦和 須原屋 ※須原屋コルソ店 ※埼玉大学生協
大宮 新栄堂大宮店 ※押田謙文堂
所沢 ※芳林堂所沢店 ※パルコブックセンター新所沢店
蕨 ※須原屋
千葉 プラザ多田屋 千葉大学生協 ※キディランド千葉店

※改造社バルコ店

船橋 旭屋船橋店 ブックセンターリプロ船橋店 ※三省堂

書店船橋店

柏 スカイプラザ浅野 新屋堂柏店

松戸 ※良文堂書店

市川 ※弘栄堂

横浜 有隣堂伊勢佐木店 有隣堂西口店 有隣堂東口ルミネ

店 ジョイナス栄松堂 慶応大学生協日吉店 ※そご

うブックセンター ※神奈川大学生協 ※横浜市立大

学生協 ※関東学院購買部

川崎 ブックセンター文教堂 ※有隣堂川崎店 ※江崎書店

向ヶ丘店 ※文学堂

藤沢 有隣堂藤沢店 西武ブックセンター藤沢店

平塚 ※東海大学協助会

小田原 伊勢治書店

厚木 有隣堂厚木店 ※青山学院生協厚木店

東京

〔千代田〕明治大学生協本校店 三省堂本店 東京堂本店 書

泉グラnde 岩波ブックサービスセンター 旭屋書店

水道橋店 法政大学生協 丸善お茶の水店 ※上智大

学購買部

〔中央〕八重洲ブックセンター 丸善本店 旭屋書店銀座店

※近藤書店

〔港〕慶応大学生協三田店

〔渋谷〕旭屋渋谷店 大盛堂 紀伊國屋書店渋谷店 青山学院

購買部 三省堂書店渋谷店 国学院大学生協 ※紀伊

國屋書店笹塚店

〔文京〕東京大学生協本郷店

〔台東〕※明正堂中通店

〔品川〕※西友大森店

〔目黒〕東京大学生協駒場店 ※都立大学生協 ※八雲堂

※恭文堂

〔世田谷〕※キリン堂バル店

〔新宿〕紀伊國屋書店本店 三省堂書店新宿西口店 早稲田大

学生協本校店 芳林堂高田馬場店 西武ブックセンター

早稲田大学文学部生協 ※多摩書店 ※敬文堂

〔中野〕明屋

〔杉並〕明治大学生協和泉店 ブックセラース西荻 書原

※ブックセンター荻窪 ※東京女子大学購買部

〔豊島〕旭屋池袋店 芳林堂 ブックセンターリプロ池袋店

※三省堂書店パルコ店 ※新栄堂書店

〔江東〕 ※新栄堂亀戸駅ビル店

武蔵野 パルコブックセンター 弘栄堂吉祥寺店 紀伊國屋書

店吉祥寺店

三鷹 ※第九書房

立川 オリオンウィル店

国分寺 ※三成堂国分寺店

国立 ※東西書店 ※一橋大学生協国立店 ※増田書店

八王子 中央大学生協 くまざわ本店

町田 久美堂小田急店 有隣堂 ※久美堂本店 ※法政大学

生協

静岡 谷島屋 吉見書店 江崎書店 ※静岡大学生協

沼津 マルサン書店宝塚店

浜松 ※谷島屋

清水 ※戸田書店

名古屋

〔東〕 正文館

〔千種〕 千種正文館 名古屋大学生協南部店 ウニタ ※池下

三洋堂

〔昭和〕 三洋堂秋中店

〔中〕 丸善名古屋支店 ※日進堂上前津店 ※丸善メイツ

〔中村〕 三省堂書店名古屋店 近鉄星野書店

豊橋 精文館 ※新曙書房

知多 ※日本福祉大学生協

岐阜 自由書房 ※大衆書房 ※岐阜大学生協中央店

津 ※別所11ビル店

四日市 文化センター白揚

新潟 紀伊國屋書店新潟店 萬松堂書店 ※北光社 ※新潟

大学生協

富山 清明堂書店 ※富山大学生協

高岡 ※文苑堂書店

金沢 書林香林坊店 うつのみや片町店 ※金沢大学生協

※福音館書店

福井 ※勝木書店 ※品川書店

長野 平安堂長野店 ※長谷川書店

松本 ※遠兵

彦根 ※大田書店

大阪

〔北〕 旭屋本店 紀伊國屋書店梅田店

〔南〕 旭屋なんば店 ※ナンパブックセンター

〔住吉〕 大阪市立大学生協

〔東住吉〕 ユーゴー書店

〔都島〕 旭屋アベノ店

東大阪 ※ヒバリヤ本社

吹田 関西大学生協

高槻 ※コーベックス高槻店

豊中 ※大阪大学生協

京都

〔中京〕 駿々堂京宝店 丸善京都支店 ※京都書院河原町店

〔左京〕 ナカニシヤ書店 京都大学生協

〔北〕 立命館大学生協 ※リーブル京都本店

〔上京〕 同志社大学生協

〔南〕 アバンティブックセンター

〔伏見〕 ※龍谷大学生協

田辺 ※同志社大学生協

神戸

〔中央〕 ジュンク堂センター店 ジュンク堂サンパル店 コー

ベックス ※日東館書林 ※海文堂

灘 ※ユーカリ南天荘 ※神戸大学生協

姫路 ※誠心堂

西宮 関西学院大学生協

尼崎 ※ブックセンターリブプロ塚新店

奈良 南都書林

和歌山 平安堂

鳥取 ※富士書店

米子 ※今井書店

松江 ※千鳥書房 ※大学前園山書店 ※今井書店

岡山 紀伊國屋書店岡山店 丸善岡山店 ※細謹舎 ※弘栄

堂書店 岡山大学共済会

広島 紀伊國屋書店広島店 広島大学生協 丸善広島支店

※平和書房 ※フタバ八丁堀店

山口 ※文栄堂 ※大学前文栄堂

高松 宮脇書店

徳島 ※小山助学館東口店 ※森住丸善

松山 紀伊國屋書店松山店 丸三書店 ※愛媛大学生協

※明屋大街道店

高知 金高堂書店 ※高知大学生協

福岡 りーぶる天神 紀伊國屋書店福岡店 九州大学生協

※積文館新天町店

北九州 金栄堂 ナガリ書店 ※旭屋北九州店 ※井筒屋黒崎

店

久留米 ※エマックスタガミ

長崎 好文堂

熊本 紀伊國屋書店熊本店 ※まるぶん ※三章文庫 ※熊

本大学生協

大分 本町晃星堂 ※晃星三省堂 ※バルコブックセンター

大分店 ※明屋

宮崎 ※中央・田中書店

鹿児島 坂口金海堂 鹿児島大学生協 ※春苑堂 ※春苑堂ブッ

クプラザ

那覇 球陽堂書房 ※琉球大学生協

〔人文会最新情報〕

○人文会では二年に一度、特約店・準特約店の改定をおこなっております。今号には新しいリストを掲載しておりますので参考にして下さい。

○本誌前号の山本論文でも明らかにしてもらいましたように、昨今の人文書・専門書の販売における大学・公共図書館の役割は近年ますます大きなものになってきております。人文会でもさまざまな研究会や資料をもとに図書館の現実や流通システムの実態を把握しようと考えています。本誌でその一端を御披露することができれば具合がいいのですが、これからの重要課題のひとつとして考えていこうと思います。昨年は早大図書館につづいて、中大図書館（多摩）の蔵書調査にも参加させていただきました。こうした活動も図書館の実態を知るうえでなほどうかの役に立つと考えられます。

○秋の研修旅行とならんで人文会の年中行事化してきた活動に、大型チェーン書店との合同研修会が、ここ毎年二月に開かれていきます。ことしは二月十九、二十日に大阪旭屋書店（参加店——本店、ナンバ店、アベノ店）と大阪でおこなうことになっています。今回で四回目となりますが、いつもの箱根に山ごもりしてみっちり討論する研修会が今回は大阪へ乗り込んでのものになります。どうなりますことやら、次号あたりで御報告できればと考えています。

（弘報委員会）

沖縄・鹿児島研修旅行報告

弘報委員長 西谷 能英（未来社）

十月七日（火）朝早く、いまにも小雨が降りだしそうなか、われわれ人文会二十一社および東京から御同行していただく日販の阿部昇常務（現・専務）、東販の堀邦夫取締役支社営業部長のお二人を加えた総勢二十三名は、羽田の国内線ロビーに集合、混雑のため

うである。なんといっても沖縄は日本の最南端なのだとあらためて思わないわけにいかなかった。

予定より少し遅れて沖縄へ向け出発した。復帰して十五年になる沖縄へ、人文会としては初の研修旅行ということもあり、メンバーの多くが初めての沖縄行きということもあって、のんびりしたなかにも期待感がどことなく漂う機中であつたようだ。南に下るにしたがって天気も回復し、翼越しに奄美諸島を見下ろしながらなおしばらく飛びつづけると、まもなく那覇空港が前方に見えてきた。

空港には東販沖縄サービスセンターの出野明所長、日販沖縄営業所の山崎晃所長らが迎えに來られていて、これから二日間の強行スケジュールにおつきあいいただくことになった。さっそくタクシーに分乗して初日の宿泊先でもあり、最初の予定である図書館関係者の研修懇談会の会場でもあるパシフィック・ホテルへと向かった。ホテルではこの研修懇談会の世話役として前日から沖縄に來ていた筑摩書房の菊池氏と合流し、ただちに昼食を兼ねた研修懇談会の態勢に入った。当日、この会に参集していただいた方々は、琉球大学教授・琉球大学附属図書館運営委員の仲程昌徳氏、琉球大学附属図書館医学部分館事務官の伊佐真一氏、沖縄大学図書館事務長の諸

見里安次氏、沖縄国際大学図書館課長の玉那覇昇氏、那覇市立図書館司書の山内敏雄氏、浦添市立図書館奉仕係長の名護正輝氏、沖縄県立図書館奉仕課長の宮城保氏、の七名であつた。人文会としてもこのようないくつかの図書館の関係者グループとの直接の話し合いという試みは初めてのことであり、図書館の実態を把握するうえで、さらには沖縄という地域の特長性を知るうえでも格好の機会であつた。

初めての沖縄は十月とはいえまださすがに暑かつた。あとで聞いた話では、朝夕を除けば日中は依然として二十五度以上の毎日だそ

このなかで、新刊の入荷、注文品の入手に時間がかかりすぎること、とりわけ専門書や学術書、小出版社の書籍などが遅くなること

が指摘された。これにたいし日販の阿部氏や東販の堀氏からは取次サイドの意見として、沖縄という地理的距離の問題もあつて現実的にはなかなか理想通りにいかない旨の説明があり、にもかかわらず体制を整備することに

よって改善策を打ち出しているとの報告がなされた。このほかに、見計らい本の入荷を希



望される意見（宮城氏）や、現物選書の要望が強いので「新刊倉庫」のようなものを作ってみたらどうかという意見（仲程氏）などもあるが、年間予算の問題等を含めて考えると、採算ベースにあいにくいこともあって、実現への道はなかなかわけわしいように思われた。総じていえば、専門書の普及をどうしたら円滑にすすめることができるかというわれわれの問題意識と、沖縄の図書館事情とは、まだまだ食い違う部分が大きいのではないかと思わざるを得なかった。

約二時間にわたる研修懇談会のあと、一瞬の時をも惜しむかのように、今度は、ふたたびタクシーに分乗して市内の書店見学に向かった。わたしたち四名のクルマも、前に一度来られたことがあるという阿部常務の御案内で、沖縄最大の書店、球陽堂の本店に向かったが、少々行き過ぎてしまい遅れをとってしまった。余談ながら沖縄には鉄道というものがなく、完全なクルマ社会だということは聞いていたが、那覇市内のメイン・ストリートである国際通りのラッシュは東京と少しも変わりがないものであった。

ともあれ球陽堂本店はさすがに充実したものであって、歴史の厚みを感じさせてくれた。このあと市内を歩きながら上洲書店、安木屋、文教図書店売部を訪ねて回ったが、これらの中心的な書店を見て感じたことは、ひとつには沖縄関係書の品揃えの良さとその豊富さであり、もうひとつは、それぞれの書店が独自の工夫をしながら集客の努力をしていることであつた。一例を挙げれば、安木屋には誰でも無料でコーヒーを飲みながら休むことができる止まり木が設けられており、ここで店を訪れたお客がゆっくりと本選びをしたり店員と話ができるような可能性がひらかれている。こうしたちょっとしたアイデアのなかに、現在の沖縄社会の厳しい現実の反映と、にもかかわらず地域に根ざしていこうとするたくましい意志を感じてしまおうと言え、いささか大げさに聞こえてしまうだろうか。

最後にもう一軒、これはいわゆる郊外店として注目を浴びつつある田園書房南風原店にまで足を伸ばした。オープンしてまだ二年ということだが、佐喜真盛秀社長によれば、ゆくゆくは人文書を看板にするような専門書店

にしていきたい意向だそうである。期して待つことにしたい。

というようなわけで、6時まえにいったんパシフィック・ホテルに戻ることができたわけであるが、これで人文会の定評あるハード・スケジュール（堀氏の弁）が終わったわけではない。一休みする間もなく、書店、取次店との懇親パーティ会場である近くの不二ホテルに向かった。ここで初日に見学させてもらった書店の代表の方たちのほか、取次店の各責任者、翌日に見学予定の朝野書房の喜友名朝勇氏らも顔を見せられ、沖繩の書店業界の現状について個々に話し合う機会をもつことができた。このパーティも9時をもって中締めとなり、あとは三々五々那覇市内に繰り出したが、深夜までつき合った者も多かったらしい。全くタフな人たちである。

十月八日（水）、昨日の疲労もあらばこそ、八時半にはホテルをバスで出発する。この日はずっとバスでの移動。まず那覇市内を抜けて一路北へ。基地の町、嘉手納の飛行場を右手に見る。ひっきりなしに離着陸する米軍機、腹の底に響く轟音とともに低空を飛び回る飛

行機は真つ青な空のなかでは黒々しいヤブ蚊といった風情で、どことなく不気味だ。バスガイドさんの説明にも、土地の三分の一をいまだに占領されている沖繩の人々の自然な反発の気持がにじみ出ているようだ。とにかくたえず飛行機の音が鳴り轟いていて、騒音公害まがいなし、という日常なのである。

そんななかを読谷村の「琉球村」に着く。ここでは織物、製糖、焼きもの作り、泡盛作りの等々の伝統工芸の実演をはじめ、かつての沖繩の典型的な集落のあり方を残存させており、さながら古い沖繩のミニアチュアといった形になっている。しかしどこか観光名所化してしまっているようで、寂然としない面があったのも事実である。

次に沖繩市の国際大学前の朝野書房を訪問。さらに東南植物楽園にまわり、ここでようやく昼食となる。おびただしい数の鯉がエサを求めて群がり、グロテスクな景観を成しているのに驚く。

午後は那覇市首里にある琉球大学を訪れる。あまりの広さにびっくりするが、丘あり谷あり池ありの丘陵地帯がそっくり琉大の敷地な

のだから、日本の大学で三番目に広いというのも当然だろう。地理不案内のため大きなバスが狭いところに立ち往生したり散々だったが、ともかくめざす生協と図書館に到着。生協はさすがに専門書がよく並べられており、まずは満足。帰りぎわに注文短冊をじかに受け取る社が何社もあった。大学図書館は国立だけあって予算、スペースとも沖繩では最大規模のようで、利用率も非常に高いとのことであった。

次に琉球大の入口にあたる西原町の球陽堂西原店を訪れる。当日は休日店にあたることをわざわざオープンしてくれる歓迎ぶりに、こちらでもいいさか恐縮させられた。さらにブックボックス具志川2号店（郊外店）をのぞき、那覇市内の沖繩県立図書館へ。前日の研修懇談会で一緒に宮城氏の案内で館内を見学させてもらい、沖繩文献の収集の問題点などをうかがった。

というようなわけで沖繩の駆け足旅行も終わり、那覇空港へ向かったのだ。鹿児島郊外の空港に着いたのはもう暗くなったあとで、そこから二日目の宿泊先である市内の林

田ホテルに着いたのは七時頃。そして休む間もなく、鹿児島有力書店との懇親会に移ったのだが、夜にもかかわらず、われわれにつきあってくれた金海堂、春苑堂本店、同プラザ店、吉田書店の皆様にお礼を申し上げなけ

△挨拶する山田親夫・球陽堂書房代表



ればならない。懇親会のあと、それぞれさらに話し合いを深めるべく夜の市内にくり出したことは言うまでもない。

十月九日(木)、この日も終日バスでの移動。まず朝から鹿児島大学生協を訪れ、背広姿の一团に学生たちが異様な眼を向けるなか、通常より一時間早く書籍部をあけてもらい、田原彰人店長、竹井昌弘氏に挨拶。店内見学のち喫茶部でしばし懇談。鹿児島大学の実状等についていろいろな話を聞く。なんといっても沖縄よりは距離的にも心理的にも近しいものを感じてしまうのはなぜだろうか。

ふたたび市内に戻り、前日の懇親会に来ていただいた吉田書店、金海堂、春苑堂を見て回る。いずれも古くからの書店であり、五〇万の人口を支えに共存しあっているようだ。次に西郷隆盛の戦跡を見ながら城山観光ホテルへ向かう。ここで南日本新聞のスタッフたちとの昼食懇談会をおこなうためである。この試みもまた人文会としては初めての試みで、有力地方紙がかかえている問題点(主として出版広告の出広量の少なさ)と、出版社側の書評等の要望とが率直に出されるなかで

有意義な意見の交換がなされた。全国紙との競合のなかで地方紙の特性を生かした紙面づくりをもっと考えたらどうかというような意見も出て、これからの地方紙のあり方にひとつの方向性が出されたように思われる。なお、この会に出席されたのは編集局長の榎石忠氏、広告局長の前橋松造氏、広告局開発部長の加藤一徳氏、文化部書評担当記者の西村敬天氏の四名であった。この場を借りて心からのお礼を申し上げたい。

このあと鹿児島県立図書館を訪れ、資料課長の大瀬忠治氏の懇切丁寧な説明と案内を受けた。

これをもって所期の旅程をすべて終え、途中で郊外店のブックスミすみ南港店をのぞかせてもらったりしながら、最終宿泊先の指宿・ホテル秀水園へと向かったのである。ここでのいろいろ面白い話はすべて割愛させていただかねばならない。翌日、ある者はゴルフへ、ある者はさらなる旅へ、他の者はそれぞれの経路で東京へ、といった形で別れたのであった。

人文会会員名簿

(〒113-91 東京都文京区 本郷局私書函89号)

1987. 1. 現在

	社 名	担当者	〒	所 在 地	電 話	FAX
	青 木 書 店	古川 清	101	千代田区神田神保町1-60	292-0481	292-0475
	大 月 書 店	原田 敦雄	113	文京区本郷2-11-9	813-4651	813-4656
	御茶の水書房	橋本 盛作	102	千代田区九段北1-8-2	230-2510	265-7767
幹 事	紀伊國屋書店	佐久間健雄	156	世田谷区桜丘5-38-1	439-0125	439-1094
	勁 草 書 房	石橋 雄二	112	文京区後楽2-23-15	815-5277	814-6854
	社会思想社	渡辺 和彦	113	文京区本郷1-25-21	813-8105	
幹 事	春 秋 社	神田 治	101	千代田区外神田2-18-6	255-9611	253-1384
幹 事	晶 文 社	萬洲 隆男	101	千代田区外神田2-1-12	255-4501	255-4506
	誠 信 書 房	濱地 正憲	112	文京区大塚3-20-6	946-5666	945-8880
	創 元 社	重光 義彦	162	新宿区山吹町77	269-1051	269-1092
幹 事	筑 摩 書 房	菊池 明郎	101	千代田区神田小川町2-8	291-7651	295-0220
	東海大学出版会	岡田栄三郎	160	新宿区新宿3-27-4		
				新宿東海ビル	356-1541	341-1833
会 長	東京大学出版会	中平千三郎	113	文京区本郷7-3-1	812-2111	内7955
	〃	竹内 康一		〃	811-8814	812-6958
	日 本 評 論 社	後藤 光行	160	新宿区須賀町14	341-6161	341-6990
	福 村 出 版	福村 惇一	112	文京区小石川1-3-17	813-3981	818-2786
	平 凡 社	丸山 正美	102	千代田区三番町5Kビル	265-4492	263-9333
	法政大学出版局	市川 昭夫	102	千代田区富士見2-17-1		
				法政大学構内	237-1731	237-8899
代表幹事	み す ず 書 房	相田 良雄	113	文京区本郷5-32-21	814-0131	818-6435
幹 事	未 来 社	西谷 能英	112	文京区小石川3-7-2	814-5521	814-8600
	雄 山 閣 出 版	武 一雄	102	千代田区富士見2-6-9	262-3231	262-6938
	有 斐 閣	佐藤 進	101	千代田区神田神保町2-17	265-6811	262-8035
	吉川弘文館	川越 重行	113	文京区本郷7-2-8	813-9151	812-3544
休 会 中	東 京 創 元 社		162	新宿区新小川町1-5	268-8231	268-8030

販売企画委員会 ◎菊池 ○後藤 石橋 重光 竹内 佐藤 川越
 弘 報 委 員 会 ◎西谷 ○原田 橋本 渡辺 丸山
 調査・研修委員会 ◎萬洲 ○濱地 古川 岡田 福村 市川 武
 ◎印は委員長 ○印は副委員長

●健康づくりへの

プログラム

宮下充正
武藤芳照 編

高齢者とスポーツ

安全に、効果的に、そして楽しくスポーツ運動を行なうことができるよう写真とデータをもとにわかりやすく述べる。一六〇〇円

東京大学出版会

金子勇・松本洗編著

A5判/二〇〇〇円

クオリティ・オブ・ライフ

●現代社会を知る クオリティ・オブ・ライフの考え方を述べるとともに、現代社会全体を視野に入れたライフスタイル研究を展開したユニークな書

荘厳舜哉著

A5判/二〇〇〇円

ヒトの行動とコミュニケーション

●心理生物学的アプローチ 心理学、比較行動学等から、ノンバーバル・コミュニケーションを論述。

福村出版

東京・文京・小石川1-3
電話 (03)813-3981(代)

◆テオリア叢書◆

オリエンタリズム

E・サイード／監修 板垣雄三ほか／訳 今沢紀子 近代ヨロッパの思想の構造を根底から批判する。 ●定価4,800円

世界の調律

サウンドスケープ
とはなにが

R・マリー・シェイファー／訳 鳥越けい子ほか 音響学、生物学等を駆使した画期的な音の世界史。 ●定価3,800円

批評の政治学

マルクス主義と
ポストモダン

T・イグルトン／訳 大橋洋一ほか 絶望的に明るい後期資本主義の時代をさかたにする批評論集。 ●定価3,600円

平凡社

東京都千代田区三番町5
〒102/振替・東京8-29639

この国の奥深く

鎌田 慧

定価1800円

この国の奥深いところで、生活の場から国権の前にたちふさがった市民たちの爽やかな闘い。国家と個人のありようを問い、法と現実の乖離を衝く。いま話題のルポルタージュ。

日本評論社

東京都新宿区須賀町 ☎03-341-6161

サブカルチャー

スタイルの意味するもの

ともすれば流行現象や若者の一過的気分に見られがちなサブカルチャーを記号論的に分析し文化の再布置化を試みた最新成果である。

*定価1800円

D・ヘブダイジ著 山口淑子訳

未来社

東京・文京 小石川3-7 電話・代表 (814) 5521

法政大学出版局

哲学の起源

オルテガ <哲学する>ことの原初の光景をたぐる。生ける理性・歴史をみたす。格二論を収録。佐々木孝訳。定価2400円

ニュートン力学の形成

ゲッセン『プリンキピア』の社会的経済的根源——パナールやニーダムらに多大の影響を与え、近年再評価著しい古典的論文の決定訳。秋間実他訳。定価3000円

禅の心理学

秋重義治 悟りの構造——坐禅における心身の変化を観察・考証しつつ、還元論を東洋的論理のすぐれた体現として位置づける。解説=秋山さと子。定価1400円

ベンガル歴史風土記

小西正捷 考古学・民俗学・文化人類学の知見を総合してベンガル半島の文化の多様性を解説する。予価2200円

東京都千代田区富士見2/電03-237-1731

●創業70周年記念出版●

論争 日本説 考古学

全6巻・別巻1

桜井清彦・坂詰秀一編集

- ①総論
- ②土器・縄文時代 I
- ③縄文時代 II
- ④弥生時代(既刊)
- ⑤古墳時代
- ⑥歴史時代

別巻

・A5 各3500円・

雄山閣

千代田区富士見2/振替東京3-1685

ミノトール [Minotaure]

一九三三・三九年に刊行された西欧の豪華美術雑誌の完全復刻版。時と芸術の極致。解説/巖谷国士出口裕弘 共5000円

顔について

矢内原伊作の本(第一回配本) 若き日の精神の躍きを伝える「顔について」「海について」など。自選のエッセイ集成(全5冊)。内容見本呈 1200円

ケネー「経済表」再考

小池基之 世界の政治社会の三大発明の一つ「経済表」三版の徹底的な吟味と分析から社会科学の原点を探る 1000円

ウィーン精神 2

ハーフスフルク帝国の思想と社会 ジョンストン ボルツァーノ、フッサール、ルカーチ等ボヘミア、ハンガリーの思想を照明。井上岩切・林部訳 3000円

東京文京本郷 3丁目17-15

みすず書房

青木書店

江口圭一著

〈46判〉 定価二〇〇〇円

十五年戦争小史

戦争は、誰によっておこされ、どのように展開し、どんな事態が生まれたか——十五年戦争の全体像を平明に書き下ろした通史。略年表・関連地図・文献・索引を付す。

坂野 登著

〈46判〉 定価二二〇〇円

こころの構造 その深層にひそむもの

いま、なぜこの時代のなか。ニューサインス、ニューパラダイム、あるいは神秘主義理論の虚像を科学的心理学の立場から批判した注目の労作！

東京神田神保町1-60 電話(292)0481

韓国民衆版画集

ウリ文化研究所編 B5判・二〇〇〇円

民衆文化運動の中から生まれた版画運動は韓国民衆の生活と希望を生きいきと伝えてくれる。さらに、民衆美術に関する論文と、光州市民美術学校の記録を併録。白楽晴／滝沢秀樹監訳

民族文化運動の状況と論理

四六判／二五〇〇円

御茶の水書房

〒102 東京都千代田区九段北1-8-2
電話03(265)5746 / 振替東京8-14774

フォト・ジャーナリズムの
真髄を語る！

写真で 何が できるか

英伸三・桑原史成・中村梧郎

時代と民衆の事実を粘り強く掘りつづけてきた3人の第一線フォト・ジャーナリストが自らの仕事と作品にこめてきた「写真の心」を率直に問い直し、報道写真のありようと可能性その真髄を語る。 A5判・1500円

大月書店 東京都文京区本郷2
電話03(813)4651 (代)

スポーティング・ボディマインド

いかに心をコントロールするか

セイヤー、他／浅見俊雄、他訳 スポーツ選手の直面する問題への対応策を具体的に述べる ■二四〇〇円

フェティシズムと快楽

いま注目の丸山流文化論・人間論をやさしいことばで説いた話題作 ■二〇〇〇円

言葉のエロティシズム

運賃重彦、栗本慎一郎、中沢新一、笠井潔氏との刺激的な対話集／■一八〇〇円

話題沸騰
丸山圭三郎の本

紀伊國屋書店

本店：東京都新宿区新宿3-17-7
出版部：東京都世田谷区桜丘5-38-1

家族内コミュニケーション

佐藤悦子 最新の学説と豊富な臨床例を駆使して家族生活に役立つ対話学を提唱。社会心理学選書 5 / 2600円 300

女という快楽

上野千鶴子 〈女と男の関係の解放〉を求めて常に活発な発言を続けてきた著者の到達点を示す論集。1900円 250

真理という謎

M・ダメット／藤田晋吾訳 反実在論を掲げ、現代哲学の最前線を領導するダメットの本邦初登場。3000円 300

仏教の言説戦略

橋爪大三郎 言語ゲーム論をモデルに、仏教を運動として記述する。言語派社会学の俊才。第二弾。2500円 300

東京文京 後楽2-23 勁草書房 振替東京 5-175253

韓国のマスコミと民衆

疾走する国・韓国、そのエネルギーの源を探る。

中村 均 西側社会で驚異的な発展を続ける韓国の内側を、日本で初めて、社会を映す鏡「マスメディア」と、それを支える〈民衆〉の両面から資料を駆使して赤裸々に描く話題作。1800円

二十世紀を超えて

R・リース・戸田仁・川辺武芳訳 人間解放という課題に直面した二人の思想家の生き方。1800円

春秋社 東京都千代田区外神田 2-18-6 ☎(03)255-9611

マネジメントの心理学

—T・Aによる人間関係問題の解決

エー・P・ワグナー著 諸永好孝ほか訳 組織での人間関係の問題、コミュニケーションをスムーズに計るための効果的な技法が、T・Aの理論を応用して詳述。四六判上製 定価二四〇〇円

新世代の国家像

明治における 欧化と国粹 バイル／松本三之介監訳・五十嵐暁郎訳 ●三〇〇〇円

社会思想社

東京文京区本郷 1・☎03-813-8105

ルネサンスの異教秘儀

E・ウィント 田中・藤田・加藤訳 ルネサンスの偉大な芸術作品にかくされた意味をその最深部から読み解く、ヴァールブルグ学派の碩学による古典的名著。待望の邦訳。6300円

ブレヒト全書簡

B・ブレヒト 野村修訳 二つの大戦と革命と亡命の日々に書きつがれた、894通の手紙。時代の核心から送られてきた手紙が語る、ブレヒト自身によるブレヒト伝。7900円

晶文社 東京都千代田区外神田 12-1-12 電話 (255) 4501

非売品

回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印